



Title	武者小路実篤における 生長 の研究 [全文の要約]
Author(s)	吉本, 弥生
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7165号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/87173">http://hdl.handle.net/2115/87173</a>
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	<a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
File Information	Yayoi_Yoshimoto_summary.pdf



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：吉本弥生

## 学位論文題名

### 武者小路実篤における〈生長〉の研究

本論文は、三部構成とした。第一部、第二部は作品論とし、第三部は思想論である。これは、作品と思想から武者小路実篤の特徴を明らかにし、同時代での位置を考察するためである。

序論では、従来の先行研究とその課題を明らかにした上で、武者小路実篤の人生において、彼が一貫して主張したのは「自我の生長」である点に触れた。従来、これは、自我拡張やエゴイズムととらえられることが多く、特に、初期について言われてきた。しかし、それは一面的な見方であったと言わざるを得ない。武者小路実篤は、出発期から精神の自由と独立の先に精神の〈生長〉を目指していた。その点を検討するために、本論では、武者小路実篤の人格的・精神的な「自我の生長」に焦点をあて、武者小路実篤の作品と思想における芸術（文学・美術）、宗教、トルストイ受容との関係を問い直した。これらは、先行研究では、それぞれ独立して論じられ、この三つが相関関係にあることを研究したものは、これまでなかった。加えて、彼の作品には、登場人物の精神的〈生長〉をテーマとしたものや孔子の遺した言葉を記した『論語』を論じたもの、釈迦が登場するものもあり、儒学や仏教との関連の考察を要した。この点も先行研究では、よくつかまれていないと言わざるを得ない。加えて、武者小路実篤は美術と深く関わったが、例えば、ロダンに対して、キリストや釈迦に対するのと同じような崇拝を示している。それは、芸術に宗教的理想を見出す態度、芸術と宗教を同一視する芸術至上主義の考えによるものであり、それにも「自我の生長」を求める姿勢を貫いている。

精神の〈生長〉を中心にすえて、これらを総合して考えるとき、トルストイの非暴力（無抵抗）主義や農業を重んじる思想、また、メーテルランクの生の肯定の受容や、武者小路実篤の思想の中でも重要な自立・独立の問題、「新しき村」の共同体創出などが相互に関連するものとして解明され、彼の思想の連続性と変化とがはじめて明らかになる。つまり、武者小路実篤の思想には、〈生長主義〉（筆者造語）が一貫している。これは、人間の心と人格を向上させ、内面を〈生長〉させ続ける主義である。

雑誌『白樺』における〈生長〉の概念も武者小路実篤と同様に、精神的成長を示す意味で使われることが多い。〈生長〉は、同時代の宗教や文学、美術とも交錯しながら、広がりを見せていた。

このような時代の動きをあわせ、武者小路の〈生長主義〉を解明した結果、細かな異同はあるものの、第二次世界大戦後まで、一貫して認めることができた。ただし、戦中期の『大東亜戦争私感』（河出書房、1942年）、『三笑』（小山書店、1944年）などについては、別稿を要する大きな課題であり、今後を待たねばならない。

以上の点から、本論では、武者小路実篤の文学作品に表現された「自我の生長」を焦点に、その文学・美術・思想・宗教の諸側面について横断的アプローチをおこなう

ことで、近代日本におけるそれらの思潮に新たな知見を加え、武者小路作品の位置を解明した。

本論の第一部第一章では、初期作品から諸宗教思想と〈生長〉のあり方の関連を明らかにした。その際、武者小路実篤から見た理想の人格が儒学思想であることを検討したところ、彼の宗教思想は、キリスト教や仏教、儒学と融合しながら、聖人の希求を目標とする人格向上をそれぞれの形で表現していた。これは、個人の独立、精神的人格を尊重する姿勢と並行していたのである。

第二章では、「桃色の室」にあらわれる社会観と精神的自由の結びつきを考察することで、独立の精神との関わりに触れ、武者小路実篤の精神的〈生長〉の内実を検討した。「桃色の室」は、労働者階級に対する平和的救済を理想としながらも、若い男が強さを身につけるまで、と先延ばしにされており、いかにしてまでは考えられていない点において、萌芽にあたる作品と位置付けられた。

第三章では、「その妹」を分析した。この作品は、武者小路実篤の目指す到達点の過程にある物語であり、世間の悪意やメディアへの批判などの社会問題をも含んだものである。作中では、西島の静子への恋とその勘違いや現実に気付こうとせず、全てを悲劇として片付けようとする広次の滑稽さ、妹への依存に見られる甘えの構図に、武者小路自身のセルフ・パロディ性などがあらわれていた。

第四章では、「友情」における精神的〈生長〉を果たした友人と果たしていない主人公の差を検討し、その過程によって、訪れる結果が異なる様を確認した。「友情」は、大宮と杉子によって、男性と女性の両者が互いを尊重し合うことで、精神的に対等な関係を築いていく様を示唆する物語である。ここでは、野島という主人公をクローズアップした見方だけではなく、杉子と大宮にも焦点を合わせたことで、この作品の〈生長〉を読み取ることができた。

第二部第五章「二宮尊徳」では、〈生長〉を実践した偉人（尊徳の農業本位とトルストイの思想）と教育の重要性が作中に描かれる様を検討した。この場合の教育とは、土地の人々の内的〈生長〉と彼らがその後、自活していく力を養うための方策である。これを武者小路実篤は重視しており、それが彼の〈生長〉のあり方であった。

第六章では、武者小路実篤の「伝記小説」である『大石良雄』『井原西鶴』を中心に近世の精神も視野に入れた作品分析を試みた。武者小路の伝記類の研究は、ほとんど進んでいないのが現状である。このことは、彼の作家活動を通じて、ほぼ全期に渡り、伝記類の執筆をしていた武者小路の活動から見れば、異例であると言わざるを得ない。このような状況にあるのは、伝記類の執筆が「新しき村」への資金を得るためであると考えられてきたことが大きな理由であると思われるが、他に、オリジナリティの問題も考えられる。本章では、これらの点を考慮しながら、武者小路実篤の伝記類の評価を試みた。その結果、復讐の問題、生への執着などの課題を克服するために〈生長〉する登場人物達の姿を作品から確認することができた。

第七章では、武者小路実篤の聖人像と『トルストイ』における共通点を作品から確認した。武者小路実篤の『耶蘇』『釈迦』『孔子』には、共通する聖人像があり、それは『トルストイ』にも確認できる点であった。本章では、これらについて作品内部の〈生長〉精神を読み取りつつ、第二部全体で検討した武者小路実篤の伝記ものを総括した。

第三部第八章では、武者小路実篤の思想を焦点に〈生長〉の過程を検討した。その中で、武者小路実篤の初期思想を中心に「自己」を検討したところ、武者小路実篤には、学習院時代から「自己」の内に「大我」と「小我」の存在があり、トルストイや儒学、仏教など東西の宗教の影響や「自我」を神としてとらえていたことが確認された。これは、武者小路実篤が最初期から多様な宗教を受け入れ、自身が〈生長〉する糧としていたことのあらわれである。

第九章では、武者小路実篤の人格向上の特徴と変遷を明らかにするため、トルストイの宗教観と非暴力主義の関係を論じ、同時代に流布したジョン・ラスキンとウィリアム・モリスについても検討したところ、武者小路実篤の人格向上が大正期における社会主義とどのような点で共通し、異なっているかも明らかになった。武者小路実篤や内村鑑三、トルストイの思想は、人格向上による社会変革の思想であり、「暴力的階級闘争」の思想との対峙であった。当時の武者小路実篤がトルストイから最も強く受けた影響は、非暴力主義的宗教観であった。

第一〇章では、同時代の思潮を検討するため、当時、新たに注目され始めた日本初期のリップス受容に焦点を当てた。日本では阿部次郎がリップスの「感情移入」を「同情」と訳しており、日本の当時の「同情」概念を調査したところ、「隣人愛」やショーペンハウアーとも交錯しながら、日本で受容されていたことが明らかになった。そこで、阿部次郎と武者小路実篤の社会観と宗教観を比較しつつ、これらを検討すると、武者小路もリップスから影響を受けており、トルストイと同様、リップスを自らが〈生長〉するための人道主義者として認めていたこともわかった。これらの点から、当時の日本で、リップス、トルストイ、ショーペンハウアーがある種の共通する思潮として受容されていたことが明らかになった。

第十一章では、『白樺』派と武者小路実篤のロダン崇拜、芸術至上主義との関係を検討した。特に、芸術家への憧憬が人格向上という〈生長〉の方法となり、精神的自由と独立が普遍の概念の確立へつながる媒体として、ロダン崇拜に見る彼の芸術観を「絵画の約束」論争から考察し、ゴッホや当時の象徴主義、感情移入美学との関連を見ていく中で、「自我の生長」が芸術へ昇華されていく過程を確認した。そこには、芸術を宗教化しようとする芸術観が存在し、武者小路実篤（自己）と人類（他者）の精神的〈生長〉に必要な思想が認められた。

第十二章では、武者小路実篤の芸術観における主要な位置を占めている画家への憧憬を確認した。その結果、彼の画家への憧れは、最も身近な他人としての憧れであり、作品には、小説家と同様、画家が多く登場することが明らかになった。彼にとっての〈生長〉が集約されている芸術観を象徴するのが画家であった。

第十三章では、武者小路実篤の宗教思想の原点として、『論語』を起点とした「調和」の精神を検討した。武者小路が『論語』を早い時期から愛読していたことは知られているが、その儒学精神を焦点として論じた論考は、一部を除いてほとんどないため、彼の儒学思想の源流を読み解くべく、武者小路の『論語私感』に息づく調和の精神を分析した。それは、第一部に論じた彼の作品群に影響を与えたものであることも解明された。

結論では、本論で検討した問題を総括した上で、本論文の成果を確認し、今後の課題として、武者小路実篤の〈生長主義〉を継続的に検討していくことを提示した。